

# つながりを 永遠に

日本赤十字社が  
～ 結んだ絆 ～

vol. 1  
全7回

## 被災地で炊き出し 阿波踊りも披露

「あの時会った皆さんがどうしているか、今も案じています」「新しい生活が心豊かに送れていることを祈っています」。東北から約800キロ離れた徳島県鳴門市に、被災地に心を寄せ続ける女性たちがいる。

日本赤十字社が全国で組織する「地域奉仕団」の徳島県の幹部5人。日赤徳島県支部は2011年5月から13年6月まで4回、事務局スタッフを含め延べ60人が気仙沼市や石巻市な

どの避難所・仮設住宅を訪ね、計2100食以上の炊き出しをし



阿波踊りの衣装で徳島の郷土料理などを振る舞う奉仕団の面々  
＝2012年6月、石巻市

東日本大震災の発生から間もなく10年。あの時、被災地には国内外から多くの支援が寄せられ、再起の大きな力になりました。新型コロナウイルス感染症の拡大で「支えた人」「支えられた人」の再会や交流がままならない中、日本赤十字社が結んだ絆を胸に刻む7つの団体・個人を訪ね、つながりのいまを確かめ合います。(7回続き)。

## 徳島県地域赤十字奉仕団 「皆さんのこと忘れていません」

被災者との交流はほんの一瞬に過ぎない。ましてや禍中での出会い。互いに名乗ったり、連絡先を交換したりするケースは皆無に近い。それでも現地で活動した5人は、「阿波牛の牛丼を『うめー』と喜んでくれた顔が忘れられない』『『遠いところ来てくれてありがとう』と感謝され、むしろ私たちが元気をもらった」と昨日の出来事のように思い返す。

3回現地に赴いた矢野壽美子さん(73)もその一人。特に印象に残っているのが、被災者から聞いたおにぎりに関するつぶやきという。災害現場では数多くを早く配る必要から、ご飯をどうしても硬く握りがちだが、それでは「食べる側はわびしい」との訴えだった。支援される側の肉声に触れて以来、矢野

さんらは地元で訓練などを行うたびに周囲にも「食べる人の気持ちを考えて」と声を掛け、おにぎりを優しく握ることに努めている。

鳴門市郊外の山里に、「赤十字ゆかりの地」のモニュメントがある。第一次世界大戦中の1917年に現地に開設された板東俘虜収容所は捕虜となったドイツ兵を人道的に接遇し「奇跡の収容所」と呼ばれるなど、赤十字の理念である「人道博愛」を貫いたことで知られる。車で数分の距離には四国八十八ヶ所巡礼の一番札所・霊山寺もあり、藤田さんは「この地にはお遍路さんをもてなす『お接待の心』が根付いている」と話す。

20年12月、5人は石碑の前に

集い、声をそろえた。「板東俘虜収容所での『人道の心』は私たち赤十字奉仕団にも脈々と受け継がれています。今回の宮城

県とのご縁を大切に、これからも皆さまと心の交流を図っていきます」。距離を超え、時を超えて、心はつながっている。

徳島の皆さんのメッセージを  
動画でも公開中

取材時の様子を短編の動画にまとめました。右の2次元コードからアクセスしてください。



被災地にエールを送る藤田さん(中央)、矢野さん(左から2人目)ら  
徳島県地域赤十字奉仕団の5人＝2020年12月、徳島県鳴門市